

秋高連全体総会 講演録

講師 西木 正明氏

(直木賞作家)

秋田の地方を変革期に活かそう

期 日 平成 21 年 7 月 22 日 (木)

時 間 午後 6 時開始

場 所 アルカディア市ヶ谷 (私学会館)



ふるさと 県人会

在京県高校同窓会連

出身校の垣根越え
360人が交流深める

在京秋田県高等学校同窓会
連合会（秋高連、友成穂秀会
長）の本年度総会・懇親会が
22日、東京都千代田区のアル

秋 田 さ き が け

2009年(平成21年)7月23日 木曜日

(27) 社会

カディア市ヶ谷で開かれ、県
内41校の同窓生ら約360人
が出席した。写真。

友成会長は「今の不況がい
つまで続くかは分からない
が、秋高連の仲間と声を掛け



合いながら、元気に生きてい
こう」とあいさつ。来賓の大
野忠右工門県議会議長らの
あいさつに続き、首都圏県人
会連合会の煙山力会長の音頭
で乾杯。出席者は出身校の垣
根を越えて交流を深めてい
た。

総会では、仙北市出身の作
家西木正明さんの「秋田の地
力を変革期に活かそう」と題
した講演もあった。

作家 西木正明氏 講演

「秋田の地力を変革期に活かそう」

只今ご紹介にあずかりました西木と申します。ホントにこの暑いのによくこんな沢山の方がお出ましになりましたね。先々週でしたか、郷里の秋田で、あげまき会という秋田北高の○○会がございますけれども、その総会に呼ばれて話をしてきたんですが、あのときも沢山おつたんですが、わたしはずうずうしい夕チで、大抵の場合こういう処に立つてもあがつたり震えたりなどしないんですけれども、あげまき会するとき、足が震えたんです。きょうもね、ちよつと半分くらい震えてます。と申しますのは、あげまき会はほぼ全員が女性なのですけれど、まあ本日は約半分半分か、やや男性の方が多くくらいですが、問題なのはわたしの高校時代、つまり人生のなかに今でも素行不良なんですけれども、最も良くない時代のことをよくご存知の方がこのなかにもいらつしやる。そんな訳で偉そうなことをいつたつておまえな、秋田弁で「おみやな、今ごろ何言つてるか」といわれておしまいですので、そのあたりのこともひとつ緩和しながらしばらくおつきあいいただきたいと思えます。

大学時代、山関係の体育会系の部活に入っておつたんですが、どうも今でも大都会は苦手でございます。ここも前に二、三度来たことがあるんですが、きょうも場所がわからなくなりまして、市ヶ谷の駅前の交番で場所を訊きました。

「すみません、ここから割と近い所にアルカイダという会場があると思いますが」とききましたら、お巡りさん、キョトンとして、「それはもしかして過激派ですか？」といますので、「いいえそうじゃなくて、昔、私学会館とかいうところでしたが」といいましたら「あれはアルカイダアでしょう」といわれて早速恥をかいて、秋田人のそそっかしいところを丸出しにしてきょうも来たわけですけれども、そんなわけでひとつ冒頭をお願いいたしますのは、メモなんかとられても後で意味不明の言葉の羅列になつておること必定ですのでどうぞそのままお気楽に聴いていただきたいと思えます。

きょうの演題は非常に立派な演題でございます。秋田の地力を変革期に活かそう」ということで、なにか元氣の出る話をせいというふうにおっしゃられた訳なんですけれど

も、わたしごときが何かしゃべっただけで元気が出たら、今ごろ秋田はとっくの昔に元気になっているんですね。ですからたいした役にも立たんとは思いますが、とりあえず世界中をほつつき歩いているもの目から見た秋田などについて約四、五十分お話ししてみたいと思います。

一口でいまの話じゃないけれども元氣のなる話、あるいはなんとかして現状を打破したいという思いは皆さん、おなじようにお持ちだと思いますし、ここに政治家の方も何人もおみえになっていますので、そういう方々の前でお話するのは誠に僭越なのですが、現状打破ということをお話ししても簡単にいうのですが、そう簡単に打破できるものではないんですね。とりわけ今回といいますか、今はこれはアメリカの連邦準備理事会のグリーンズパンが言った言葉だったと思うんですけども「百年に一度の経済不況、金融恐慌である」というようなことを言ってますけれども、わたしは多少、いわゆる近現代史をかじったものの立場からすればこれは百年に一回の恐慌あるいは不況なんかではないのではないかと勝手に思っておるわけです。と申しますのも我々秋田人ももちろん日本人は今から六十四年前に未曾有の太平洋戦争の敗戦を経験しております。あのときのあらゆるものを徹底的に破壊し尽くされた状況からみれば、今なんかは、あのときがもし犬に噛まれたような状態であるのであれば、現在は蚊にさされたようなもんだというような感じがしなくもありません。こんなことを言うところにはいらっしやる方はそんなことはないと思います、明日自分の会社がつぶれるような方は相当お怒りになるんじゃないかと思うんですけども、実際そういうふうに思います。

今回の場合いくつかの、我々がもつと安心していいと思えるような要素があると思うんですけども、まず終戦直後の話は別としましても、今から、一九二九年ですからちょうど八十年前になるんですかね、一九二九(昭和四)年十月四日の木曜日、前回もアメリカのウォール街発です。例の大恐慌ですね。あのあとの一連の動きなどをみて、我々の今後の生き方を考えてみていいのではないかと思ったりするんです。あの恐慌から比べれば今回は本当に気が楽だと。お気楽なことをいうみたいですが、なぜそんなふうになるかといいますと、あの恐慌によって戦争が誘発されています。第二次世界大戦ですね。この恐慌によって一九二九年から第二次世界大戦が始まるまでちょうど十年。一

九三九年の九月一日が第二次世界大戦、所謂ナチスドイツのポーランド侵攻ですから、ちようど十年です。正確にいうと、十年より一カ月ほど欠けますけれども、でも現在のこの経済不況に依つて将来この十年後にどつかで戦争が起きるか、こぜりあいくらい、地域戦争くらいは起きる可能性は充分あります。ですけど世界戦争になる可能性というのはいずれも皆無です。それをやったらもう終りですから。というのは、ロシアとアメリカ両方足しただけでも核兵器がもう三万発から四万発ございます。中国だって百以上持つていますね、現在（いま）。それを全部足して、それを例えばこの地球上に全部ばらまいたら我々、ここにいらつしやる方々をふくめて多分地球上に誰も残らんとしますね。やれない戦争ですので、これから先の世界戦争は。そういう面でもいくらか気が楽だと思ふんですけれども、それとは別に当時の日本、そして当時の秋田に及ぼすいろんな影響も、あのかのころのほうが今よりもはるかにきつかったような気がいたします。

一九二九年十月四日のあとの影響はというと、まず日本の基幹産業がぶつ潰れました。基幹産業というと当然ながら当時は農業だったんですけれども、農業のなかでも輸出品目として一番お金を稼いでいたのが生糸——絹、シルクですね、ウォール街の株の暴落から二カ月後の十二月十二日に横浜の生糸取引所で大正九年以来の大暴落が起きております。これによってほぼ生糸は輸出品としての息の根をとめられたわけなんですけれども、そのあと約三週間後の一九三〇（昭和五）年一月十一日にはこれはまた時の政府がへまなことをやりまして、金の輸出解禁というのをやった。金の輸出解禁というのは、それまでは金の輸出は絶対に通貨とはリンクさせずに、輸出はまかりならんということになつてた訳ですけども、要するに円と金の兌換（たかん）——交換ですね——を解いたということなんです。

例のニクソン・ショックの逆をやったわけですけども、この結果、日本は底なしの大不況になりました、とりわけ生糸産業への依存が大きかった長野や関東北部などの生糸の産地は壊滅的な状態になつたわけでありまして。この影響というのは本当に大きくて、じゃあそういう農村の疲弊に対し、日本は何をやったかといひますと、まずとりわけそういう農村地帯に対するケアをしなければいけないので、彼らをどつかへ移して、もう一度生活する場を与えようということ考えた結果が、満州国の建国ですよ、一九三二（昭和

七)年です。その結果、何が起きたかという日本は完全に国際的に孤立するはめになりました。当然ながら行きつく先は、戦争に繋がるような流れができたわけです。でもそういうときでも実は秋田は意外にしぶとく頑張っておりまして、ご存じの方も多思いますけれども、秋田のなかには今でも誇りに思えることがあります。北方教育社って、ご存じの方も多かれと思うんですけども、当時の日本の小学生の教育、とりわけ国語の教育、なかんずく綴り方ですけれども、その綴り方の絶対的なお手本というのは鈴木三重吉さんという童話作家がおりますね。有名な「赤い鳥」というのを書いた作家ですけれどもこの人の作品がほとんどの教科書に採録されております。子供たちはそれを基に綴り方の勉強をした。これに対して、秋田で創設されたその北方教育社に属しておりました成田忠久さんとか滑川道夫さんという——学校の先生でいらっしやるんですけども、この人たちが何を言ったかといいますと、教育に於ける生活の重要性、これはまだ小学生的教育に対するいいかたにしてはずいぶんなことと思うんですけども、要するにそういうファンタジックなことばかりやっておらんでちゃんと現実を見据えた教育をしようと言いました。そのためにはたとえ小学生の綴り方といえどもちゃんと自分たちの生活に密着した日々の暮しのことについて書かそうじゃないかということを書いたわけです。この背後にはやはり当時いろいろ知識階級が興味を持っていたマルキシズムその他の影響があったわけですね。そのことの善し悪しは別としまして当時から秋田は我々の普段思っていることとは違って、教育に対しては日本でも最先端の感覚を持っていたということですから。だから決してこの数年間、小中学生がテストを受けるとほぼ日本で一位になるということは偶然の産物ではありませんで、七、八十年も昔からそういう教育の伝統というものがあるわけです。どうもわたしなんか自分が成績が悪かったものですから、秋田人というのはいかにみんなどんなボンクラじゃないかと思っておったんですけれども、何のことはない、ボンクラなのは自分だけであって、周りの方は本当に日本でも有数の学力の方が多いわけで、そんなことでどんな状況にあっても社会をどうにかしようという根幹にはやはり教育があるんだというふうに、わたしは自分がロクでもない学生であったのでこの年齢(とし)になって余計そう思うわけなんです。そういう意味で秋田は本当に誇りを持っていいだろうと思います。

そんな理由(わけ)でいきなり秋田のいいところを話したんですけども、一方で秋田人の特徴つていろいろありますが、最も目立つ特徴というのは独立独歩の気風というんでしょうかね、独立独歩の気風というところと聞こえはいいんですけども、要するに頑固で群れない。群れないというところがいいです。わたしもどうもそういう傾向があるんですけども、なんのことはない、これは人と協調性がないということに通じるんですね。もつというところ田はシヨシガリで人と交わらないという言い方も出来るのかもしれないんですけども、いずれにしても割合にチームワークが不得手のような気がいたします。秋田の人間だけではなくて日本人全体にそういう傾向があるんですけども、皆さん、例えばアメリカにいらつしやつた、あるいはヨーロッパにいらつしやつた、まあ何処でもいいんですけども、ニューヨークに今、大きなチャイナタウンがありますね。それからサンフランシスコにもチャイナタウンがあります。もちろん日本にも横浜にも神戸にもチャイナタウン、中華街があります。おんなじように外国に日本人も沢山出て行った時期があるんですけども、わずかに日本人街らしきものといえばロスアンゼルスのリトルトーキョーだけですね。リトルトーキョーもいまはほとんど壊滅状態になつているんですけども。リトルトーキョーで今わたしたちも一番記憶に残つていることといえば、この間獄中で自殺した三浦和義さんのロス疑惑事件くらいしかありません。外国へ出て、プラス面とマイナス面と両方あるんですが、日本人は群れない。なんとかして外国の社会そのものに溶け込んでいこうという気風があります。日本人もしくは日系人の人口が多いブラジルの、サンパウロに日本人が多く集まつて生活しているところがあります。そこで日本人同士の交流は一応ありますが、一緒に助けあつて何とかするということじゃないんですね。これに対して例えば韓国の人なんかは、ひとりが外国へ出て、そのひとりが成功すると一族郎党をあげてだあーつと行くわけなんです。あつという間にニューヨークでも立派なコーリアン街がありますね。日本人は極めて苦手で、なかならずその日本のなかでも秋田人はこれほどう美点といつてもいいんですけども群れない。東京で会つて酒を飲むことはあつても、じやあ普段手を携えて一緒に商売をしようかなと思つた場合、「ああ、いやあ」というケースが多いんですよ。これは他の県に比べると際立つているようにわたしは思います。そのひとつの例として、あるいはひとつの結果としてなんですけれども、ここにも政治家の偉い

先生方がいっぱいいらつしやるので秋田弁でゴシヤガレルかも知れませんが、秋田の群れないことの裏返しに誰かひとり突出してくると、よつてたかつて足を引っぱる、足の引っぱりあいというのが起こるわけですよ。その結果としてここに非常にわかりやすいデータがございます。

日本で内閣総理大臣が最も沢山出ている県というのは皆さんご存じですよ。じゃあ二番目、三番目がどこか即言える方がいらつしやるでしょうか？ 一、二番は明治維新の流れからして当然ながら薩長だと思いがちですが、それは半分正しく、半分まちがいです。長州からは伊藤博文、山縣有朋、桂太郎、寺内正毅、それから田中義一、ここまです。戦前かな、戦後は岸信介と佐藤栄作と安倍晋三……八人です。それで二番目はどこか？ 隣です。奥羽山脈を越えた隣です。あそこは原敬、齋藤實、米内光政、それから鈴木善幸は戦後です。これで四人なんですけれども実は東條英機も本籍は岩手ですから五人です。さて二番目はどこかというところこれはもう全員が戦後ですけれどもわたしの記憶では群馬です。福田赳夫さんと中曾根康弘さんと小渕恵三さん、福田康夫さんですね。次にくるのは東京とか薩摩——鹿児島なんですけれどもこういうふうに見てみますと、秋田は陰も形もないですね、少なくとも総理大臣に関するかぎりでは。立派な政治家を今まで沢山輩出しておりますし現在も立派な政治家がいらつしやいますけれどもなぜか総理大臣は出ない。今たまたま総理大臣を沢山輩出している県についてしゃべりながら気がついたんですが、ひとつの特徴がありますね。同じ傾向。これを言うとき絶対怒られると思うんですけども風土的に非常に厳しくて貧しいところが多いです。岩手は日本のチベットでしょう。群馬はかかあ天下と空つ風じゃありませんか。山口は、長州はなんかあるかといったらあすこも何もないですよ。結局ですね、そういう非常に厳しい風土のところがいやおうなしにみんなが結束して誰かひとりが頭角を顕せばそのひとをどんどん押しあげてその人を中心に頑張っていくしかない、その結果がたまたま総理大臣の数に顕れているのではないかと。一方ですね、秋田は立派な方がいっぱいいらつしやるのに今まで総理大臣が出なかったのはその必要がなかったからだとかわたしは思っています。なぜならいまではこれだけ高齢化の社会になっていますけれども農業が日本の基幹産業であったときは秋田は文句なしに日本でも最も裕福な県のひとつだったですから。ちなみに平

成五年を皆さん、思い出してください。平成五年といいますが日本中が冷害、旱魃でもってどこもかしこも米がほとんど穫れなかった年ですよ。外米を輸入するかしないかで大騒ぎした年でもあります。ですのでわたしはたまたま物書きになって日本中取材その他でほつき歩いてたんですけれどもみんなどこへおじゃましても農家の方はみな大変だ大変だとおっしゃっているんですね。わたしはたまたま実家へ帰りまして周りの農家の方々と濁酒一杯飲みながら話しても、秋田の農家の方も大変だ大変だとおっしゃる。でも大変だ大変だといながら目が笑ってるんです。大変だ大変だという意味が違う。秋田以外の県のひとたちは本当に大変で、明日どうしようかという状況なんですけれども、秋田の農家の方はもちろんこれ冗談ですから怒らないでくださいね。農家の出身の方がいたら。秋田の農家の方は大変だ大変だ儲かって大変だって言ってるんです。だってあの時は闇米が暴騰したわけですから。自主流通米という言葉が一応あったかもしれないけれどもまだそんなにどんどんやれる時代じゃなかったわけですよ。いってみればそれぐらい秋田というわたしの県は裕福で余裕のある土地柄なわけなんです。そうしますとあんまり無理して中央で頑張る必要もなければ、まして政治家のかたはみんなが一生懸命押し上げてその人に頑張ってもらう必要もない。今は違いますけれども過去にはそういう時代が永かった。その結果、非常に呑気でよそ者に優しい県民性が出来上がったわけです。

わたしがいぶんあちこち法螺吹いてまわったせいで、最近マスコミにも全国紙の言葉としても登場するようになったんですけれども秋田ラテン説というのがほぼ定着いたしました、わたしはプラスの意味で言ったのですが、必ずしもプラスの意味でとらずに「秋田ラテンか、そうか、そんなにあすこは面白いか」と面白いという言葉にはいかがわしい意味も含まれているんですね。わたしなんか「そんなに思うなら秋田に行って盛り場廻って来い」と実際に行った奴がいるんですね。やっぱり面白かったというからそいつはいい思いをしたのかも知れませんが、いけません。

わたしの友人に篠原クマ(勝之)という鉄のゲージツ家がおります。彼が何年前ですけれども秋田で仕事をする事になりました、それでわたしのところに電話をかけてきて「西木さん、今度おれ秋田に行く。秋田美人をどうしてもみたいから紹介しろ」と。そ

んなこといきなりいわれても、わたしの周りに秋田美人はいっぱいいますけれどもおまえみたいなやつには紹介できないと、なぜならば非常に危険だしね、君の素行について一片の信頼もおいてないということと言った。そんなこといわないでただ観るだけだからというから、それじゃあわかった、わたしの高校の同期、秋田高校の同期生ですけれども小野崎氏という秋田放送の報道部長までやった親友、有名な音楽の小野崎三兄弟のなかの一番末になるんですかね、彼に電話を入れまして、かくかくしかじかこういう男が行く、ちよつと面倒見てやってくれと。そう言ったのは、わたしはクマに「テレビの仕事で行ったというけれどもどこのテレビだ、NHK か？」といったら、「違う、民放だ」「じゃあ秋田放送か？」というところだ。じゃあ秋田放送だと思って秋田放送に電話した。そうしましたら一週間後にクマが帰ってきて怒ってるんですね、電話で。

「秋田へ行ったけれども誰もそういうようなところへ連れていつてくれなかった」と。おかしいなと思つて。

「どうしても行きたいといつたらまたまたそこにいた人が連れていつてくれたけれども、行つたら美人はいなかった。いたのはイノシシだけだ」と言うんですよ。わたしは怒つて、

「秋田は寒くてイノシシなんかいない。いるのはクマ、おまえだよ」

彼は北海道の出身なんで本州には全部イノシシがいるんだろうというふう思ったらしいんですけど、イノシシしかいなかった。どうも思うに話がくい違っているので、「ホントに秋田放送か」といつたら「いや違うな」。もしかしたらここには国会議員の鈴木陽悦さんがいらつしやるけれども秋田テレビかなという話だったのね。「おまえひどいこと言うな。なんで秋田テレビといわないの」

「秋田つて民放そんなにあるのか」

ますます馬鹿にされて「もう二度とおまえに秋田の人間を誰も紹介しない」と言つて二人でヤケ酒を飲んだことがありますけれども、そんなこんなで、秋田のラテン説に関していうと、必ずしもわたしの意図を正しく理解してくれてないひともいるわけなんです。やはり秋田の良さのなかには自分たちの境遇を笑い飛ばす芯の太さというか明るさというか、それがあつたと思つてます。

今、永く暗い冬と言つたつて皆さん、そういう実感が無いと思つてすけれども、昔は

本当に十一月の末くらいから雪が降り始めて翌年の四月くらいまではずーっと雪に閉じ込められていた。特にわたしのふる里の西木村、とりわけ奥の松木内地区のあたりはもう雪が三メートルくらいも積もって、わたしの親父は貧乏な医者だったんですけれども冬の往診が一番大変だったんです。松木内地区で急な患者さんが出ますと箱櫃で迎えに来るわけです。当然冬場はバスなんか走ってませんし、いわゆるトテ馬車と称して乗合いの馬櫃があつたんですけれどもそれも夜は走っていない。当然人間が箱櫃を用意して迎えに来てくださるしか方法がないわけです。夜の九時、十時に出かけて行って帰ってくるのは朝の四時か五時ですね。寒い寒いといつて帰ってきて、ごろんと二時間も寝て、また七時か八時には起きて、九時くらいからは診療をやるという生活をうちの親父はやっておったんです。わたしはあれを見て、死んでも医者になるのはやめようと思いました。わたしは医者の方男坊主ですので、本来医者になって地域にちゃんと尽くして、今頃はあの人は立派なひとだと多分言われなと思うんですが、親父をみているあいだにこりや駄目だ、おれにはとても務まらない。そういうことで、結果としてこういうような世のため人のためにはなんの役にも立たない小説家という虚業になってしまったわけです。

とにかくあの時代の秋田の状況を知るものにとつては今の秋田の状況というのはホントに天国みたいなもののような気がします。でもやはり、そうはいつでも日本全体がこれだけいろんな意味で発展しますと、やはり隣の芝生はよくみえますから、秋田はもつともっとよくなりたいというふうに思うのはあたりまえですし、そこで秋田の地力云々という話が出てくるんだろうとは思いますが、わたしは最近つくづく思うんですが、やはり遅れて発展してよかったなあ。失うものもいっぱいあったけれども少なくとも他の日本の地域、他の県ほどのものを失ってはいない。たまたまわたしは身の程もわきまえず、地元の内陸縦貫鉄道の内陸線保存運動なんかの末席に加わらしていただいておりますけれども、これはなにも地元の方々の足として残そうというふうにして申し上げているわけではないんです。やはりああいう秋田の内陸で生活している方々が、今後つつがなく生きていくためには何か生きていくための糧が必要だ。農業はいま曲がり角の大変な状況ですけれども、一方で人口が減ってもやれるものは観光産業がまず思いつくわけです

よね。内陸縦貫線の沿線というのは、われわれの感覚ではなにもないところなんです。ところが今や、わたしどもにとつてはかつて食べ物でしかなかったカタクリが観光資源になり、それからホントにお金がなくて昔のお武家さんが、明治維新後建て替えることができなかった武家屋敷が観光資源になっている。これを言ったら仙北市の石黒市長さんに申し訳ないと思うんですけども、秋田は他所ほど景気がよくなかった時代が永かったので、昔のものがそのまま残ってしまった。そのお陰でいま、わたしどもはどうかやれているという部分もなくはない。なにも昔のものがいいとは限らないけれども、なんかそういう今まである生活文化をきちんと残して、そうして自分たちの子孫に繋げていくというのも、ひとつの生きる方法じゃないかと最近とみに思います。

考えてみてください。例えばヨーロッパにわたしども観光旅行に行きますね。で、観るものは何ですか？ ま、たまたまアルプスみたいに高い山もあればあるいは地中海、エーゲ海のリゾートみたいに非常に立派な観光地もあります。でもわれわれがヨーロッパで観るものといえば今から何百年前から在る街のたたずまいだとか、その生活だとか、そこに在る教会など、いつてみれば彼らの生活を見に行っているようなものです。われわれには永い間、その感覚がうすれていたような気がしますね。ヨーロッパ人というのはそのあたり非常に長けていますから、自分たちの生活を見せて、お客さんから金をとって生きている。あの誇り高いイギリスの貴族ですらも自分の住まいを開放してお金をとっています。まあ、これが必ずしもいいかどうかということは別にしまして、われわれのふる里はそれが出来る土地柄でもあります。そのあたりとそれから近代的な産業の発展とのかねあいというのがこれから最も必要とする状況のなかに入っていくのではないかなと、そんなふうにとつたりすることもあります。

いろいろこれから先、秋田もきつい思いをすることがあるだろうし、またいいこともあるかもしれないけれどもあんまり思いつめてしまわないほうがいいなとわたしは思うのは、依然として自殺率がすごいですね。この間も沖縄で講演したときに「秋田でいま一番の問題は何だ？」とお客さんから、来た方々から尋(き)かれて、「いや実は自殺です」と言ったら、「ほんとか！ いや沖縄もそうだ」と妙なところで意気投合して、その人と泡盛をこたま飲んでその日、わたしも自殺したくなりました。人に優しく、お客がくれば一生

懸命持てなして、自分の明日の生活すら忘れてお金を使う……。そういう風土は沖縄と秋田はちよつと似ているところがある。貯蓄率ビリとかも一緒に、本当に良く似ていますね沖縄と秋田は。自殺をなんとかしようと思っている方々にしてみれば、お前は何言うかといわれると思うんですけども、とにかく秋田人の良さは、これは昔から他所（よ）そものを大事にする。そしてもうひとつ、他所に出て行く。これも秋田人の大きな特徴なんですけれども、どこか行っちゃうんですよ、みんな。ちよつと元氣のいい人は。有名な白瀬轟なんかはまさにその筆頭なんですけれども、あと皆さん、天野芳太郎という人知っています？ 男鹿の人、知っていますよね。男鹿の脇本の出身だと思っんですけども戦前から南米へ行って、戦後はずっとペルーに住みついて、ペルーの古代文化を調べて、自分で博物館を作ってしまったひとです。いまペルーで最も尊敬されている日本人のひとりですね。フジモリさんも尊敬されておったんですが、政治家になったのが間違いのもとですね。

実はわたし、フジモリさんが大統領になられる前から存じあげていて、たまたま南米で暮らす日本人の取材というものをやっていたときにペルーに行ったら、案内してくれたひとが、当時農業大学の学長さんだったフジモリさんに会わせてくださった。とても博識な方なんですけれども、非常に穏やかで、まさかあのひとが大統領になるとは思っていなかった。一緒に案内につれてくれた沖縄出身の大城さんという通訳のひとと、「先生、この国はどうしようもない、われわれ日本人に日系人に、四年間でいいから任せてくれたらなんとかなるじゃないんですか」と言ったらフジモリさんは「とんでもない。この国の今迄の歴史、考えてもらんなさい。カソリックとメスティーズ——いわゆる白人とインディオの混血のひとたちの永年にわたる対立は、一朝一夕でどうにもなるもんでもないから、これは日系人に任せられてもどうしようもない」ということをおっしゃった。当時たまたまですね、わたしが日系人の取材というふうに言ったんですけど、もうひとつ別の狙いがあった、当時ペルーは南米のゲリラ騒ぎの本家本元みたいな状態でした。センデロ・ルミノソという山岳ゲリラとそれからツバクアマルという都市ゲリラが両方活動していて、フジモリさんの時代に日本大使館を占拠したのはツバクアマルのほうです。そういうことがあったもんですからフジモリさんは日本人が出ていったって駄目だとおっしゃったんですね。とこ

ろがその半年後に彼は大統領になっちゃいました。一年後にたまたまた用があつてまたペルーに行つたんでお目にかかりたいといつたら、ちゃんと覚えていてくださつてお目にかつたんですが驚きましたね。以前は三三三として円満そのもので、この世の中でこれほど人格的に丸い方もいないのではと思つていたのに、目付きが全然違うんです。政治に身をおいたときのいろんな意味での精神のテンションの凄さというものがもろに顔に出て、生まれるときから政治家みたいな顔をしていました。そのあと、しばらくして例のゲリラによる人質事件が起きたんですけれども、ああいうことになつて、いまそれが罪に問われて獄中にあるわけなんです。彼のあの肝つ玉の座り方なんかもある意味では日本人ならではのうふうにわたしは思つています。彼は熊本出身で、話がちよつと秋田から脱線したのですが、そういう海外でも頑張つているひともいますし、秋田人でも南米で頑張つているひとがいますよね。

たまたま去年が秋田から南米に移民して八十周年ということで、わたしの中学校時代のポン友が南米に最後の移民で行きまして、成功して大きな農場を持つまでになりました。今から十何年前、彼のところに行つたとき、わざわざサンパウロまでトラックで迎えに来てくれて、彼の農場まで行つたんです。ひとくちに迎えに来てくれて農場まで行つたというふうに言いましたが、片道千五百キロです。彼は、ミナス・ジエライスというサンパウロの北にある州から千五百キロをトラックを運転して迎えに来てくれて、その日の夜はサンパウロでしこたま酒を飲んで、次の日は身体中がなら潰け状態のまま、わたしは完全にもう寝込んで。彼はなら潰け状態のまま運転しました。むこうは酔っぱらい運転というのはないでしょうね。千五百キロの道を帰つて彼の家に一晚泊まつて、彼の農場をみせてもらつて、ブラジルにこしかないという温泉に入れてもらつて、次の日、彼が千五百キロを運転してわたしをサンパウロまで戻して、また千五百キロを運転して家に帰りました。たつた二泊三日のあいだに彼は六千キロをトラックで走つたことになりすね。あれもやっぱりね、わたしは秋田人だと思つた。むしろ彼の家はブラジリアのほうが少し近いように思つたんで「ブラジリアまで飛行機で行くよ」と言つたんです。「いや、おまえが来たのに行かないわけにはいかない」と言つて迎えに来てくれた。そして一昨年、秋田県から行つたブラジル移民の代表として秋田に八十周年記念のお祝いの行事をやることになつて、作文コン

クールをやつて、そのなかの優秀な子供さんをブラジルに招待するというような企画を携えて当時の寺田知事さんに会いたいというから、恐る恐る伺いをたてたら、いいですよと言つてくださったんで会えることになったんですね。そして彼から嬉しそうな電話がかかつてきて「これから家を出発するから」と言つて、次の日の明け方、彼の奥さんから電話がかかつてきました。「サンパウロの郊外で、乗っていた車がトラックと衝突して即死しました」というようなことがあつた。秋田人は海外に雄飛して、やはり彼の場合も群れてないんですよ。ひとりをやつてますね。これは佐藤揚明という男の話です。

秋田の外に飛び出して行つて雄飛したといえ、どうしたつて山下太郎の名前を挙げざるをえないと思ひますね。アラビア太郎を皆さん、ご存知ですね。カフジ油田、サウジアラビアの地図の東側、クウェートのすぐ南にある地域ですけれども。わたしもアラビア石油がなくなる一年前に現地へ行つて、約十日間くらい滞在しました。これがなるほど秋田県人の山下太郎の仕事か、国策でもあつたんですね。日本で唯一の日本人が経営する油田かと深い感慨にふけたことを覚えています。そしてその感慨と同時に、ひとつ非常に便利な知識を得ました。秋田人としてはこれは覚えて当然なのですけれど、ドロクの造りかたです、現地の。アラビアというところはイスラム教原理主義の国ですから酒はご法度です。でも日本人、特に秋田県人が海外に行つたら、酒飲むなといわれたつて飲まないわけにはいけませんよ。それで地元の人が教えてくれたのは、とにかく、イースト菌を持つて来いと。パンを作るときのイースト菌ですね。膨らますやつ。あれと砂糖があれば大丈夫だよ、と。砂糖に水を入れてイースト菌を入れてほつとくとサトウキビ焼酎が出来ます。是非お試しくださいね。甘いけれど結構イケます。

そんなことで、いろんな秋田県人に会つてきましたけれどもやはり海外に飛び出す秋田人というのは他の県から行つたひとと違いますね。なんでも来いみたいな感じがあるんですね。これは秋田県人の県民気質としていいところだと思つたので、わたしが秋田ラテン説を唱えたのはまさにその点であります。とりとめのない話でありましたが、気がついたらもう予定の時間になつてしまいました。これから先、この不景気が一年で終わるのか五年続くのか十年続くのかわかりませんが、秋田はなくなりませんよ。秋田はいつまでたつても秋田です。ですので、あんまりジタバタせずのんびり頑張りましょう。

秋田の地力を変革期に活かそう

masaaki nishiki presents official Web Site _____ profile

プロフィール



西木 正明 作家

昭和15年5月25日生まれ。秋田県仙北郡西木村出身。西明寺小、中学校、県立秋田高校昭和34年卒業を経て、早稲田大学教育学部中退の後、平凡出版（現・マガジンハウス）に14年余り編集者生活を送り、昭和55年独立して、作家活動に入る。

（受賞と主な刊行物等）

デビュー作『オホーツク諜報船』（角川書店刊）

昭和55年第7回日本ノンフィクション賞新人賞受賞。

昭和63年『凍れる瞳』『端島の女』（文芸春秋刊）第99回直木賞受賞。

平成7年『夢幻の山旅』（中央公論刊）第14回新田次郎文学賞受賞。

平成12年『夢顔さんによろしく』（文芸春秋刊）第7回柴田錬三郎賞受賞。

『凍れる瞳』（文芸春秋刊）日本テレビドラマ化。

『悪夢の封印』（角川書店刊）フジテレビドラマ化。

『蛇頭』（講談社刊）日米香港合作映画「チャイナシャドー」原作、

宮本亜門演出・ミュージカル「香港ラブソディ」原作。

『オホーツク特急』（青樹社刊）NHKテレビ連続ドラマ「鳥の唄」原作。

『夢顔さんによろしく』（文芸春秋刊）四季ミュージカル「異国の丘」原作。

テープ起し文責・船木俱子（男鹿海洋）

tomokofunaki.com

こういうときジタバタしたってロクなことはない。まあここにいらつしやる方には言う必要がないと思いますが、どんなことがあつても死なないでください。終わります。

『ルーズベルトの刺客』（新潮社刊）平成20年10月舞台化。平成21年
夏以降中国上海電影で大河ドラマ化決定。

- * 平成20年の新刊は『極楽谷に死す』（講談社3月25日刊）『ウェルカム・トウパールハーバー』（角川文庫12月刊）他に文庫や雑誌など多数。
- * 平成21年予定の新刊は『さすらいの舞姫（小説崔承喜）』（光文社7～8月刊行予定）『ガモウ戦記』（文芸春秋10月頃予定）『潜行三千里の謎（辻政信はなぜ消えたのか）』（徳間書店年末刊予定）

（主な職歴）

日本推理作家協会賞、オール読物推理新人賞などの選考委員を歴任後、現在植村直巳冒険大賞、大宅壮一ノンフィクション賞、さきがけ文学賞等の選考委員。

NHK国際放送審議会委員、国土庁審議会専門委員・秋田県総合開発審議会委員内閣府生活達人委員会委員などを歴任。現在、日本ペンクラブ常務理事日本文学振興会評議員、笹川スポーツ財団評議委員、経済産業省産業遺産選定委員、海上保安庁アドバイザー、秋田大学客員教授など

以 上

秋田県の日本一と2位、3位

秋高連の皆さんは秋田の観光大使ですよ。

出展：美の国あきたネット「秋田県の日本一と全国ベスト3あれこれ」

1 位



田沢湖の深度 423.4m

1 位



ジュンサイの収穫量
818トン

1 位



農村女性企業数
442件

1 位



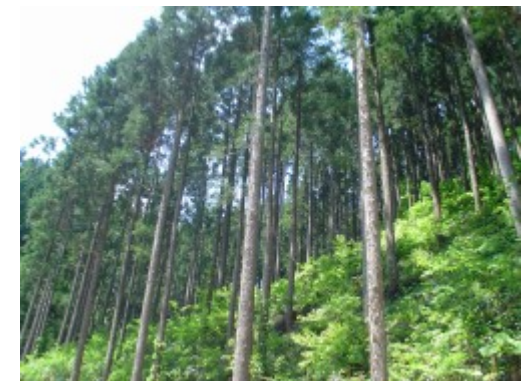
とんぶりの収穫量 182トン

2 位



清酒の販売(消費)数量
成人一人当たり 11.8リットル

3 位



杉の生産量 718,000m³

在京秋田県高等学校同窓会連合会
(秋 高 連)

会 長 友 成 穂 秀

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-22-8
(T/F 042-222-2229)

幹 事 長 大 野 省 治

〒112-0004 東京都文京区後楽1-4-11-704
(T/F 03-5802-6818) (携帯 090-5771-5331)
(E-mail kouraku@m6.gyao.ne.jp)

記 録 担 当 船 木 俱 子

(Tel: 047-381-4145 / Fax: 047-381-4022)

<http://tomokofunaki.com>